

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

「快」からはじまる成長と自立

「ダメ」、「あぶない」、「知らなくていい」——毎日のようにこんな言葉をかけられたなら、人生はつまらないものに感じられるだろう。“あなたのため”だと言われても、ちっとも私のためではない。これらはどれも私以外の人の安全と利益を守ろうとする言葉だからだ。「みんなが迷惑する」、「何かあったら困る」、「知らせるとややこしい」こんな言外のメッセージが聞こえてくる。

この3つの言葉は、障がいのある人への教育や支援の現場でもしばしば耳にする。とりわけ性に関する内容については、ある性行動がいかに「ダメ」であるかを教え、それが「あぶない」ことだとわからせる点に教育者の関心が注がれ、さらに「知らなくていい」ことまで踏み込みすぎないように細心の注意が払われる。

事実、障がいのある人の性問題行動や性被害への対応に苦慮している現場は多く、これらの課題にきちんと取り組もうとすればするほど、さらに深刻な問題が浮きぼりになってくる。そのため、とにかくすぐにでも周囲の迷惑や犯罪になるような性行動はやめさせなければならない。出会い系サイトを通した犯罪に巻き込まれないように守らなければならない。たしかに知識は大切だが、あまり教えすぎるとかえって興味を駆り立ててしまうかもしれない……と必死にならざるをえない。結果、熱心な現場ほど「ダメ」、「あぶない」、「知らなくていい」の言葉が増えてしまう。

しかし、それだけ熱心に取り組んだとしても、人の行動はなかなか変わらないものである。誰でも「わかってはいるけどやめられない」ことがあるし、たとえルールや危険性が理解できたとしても、それに代わる楽しさや居場所がなければ「リスクのある楽しさや居場所」を求めるのも必然である。熱心な現場は無力感



生活をゆたかにする性教育

障がいのある人たちとつくる
こころとからだの学習

千住真理子著、伊藤修毅編
クリエイツかもがわ
定価 1500 円＋税

に陥り、性教育をやめるか、より大きな声で「ダメ」と叫ぶようになる。言われたほうも、言うほうも苦痛でいっぱい。これはつらい。

そんな性教育を脱するヒントに溢れているのが、本書『生活をゆたかにする性教育』である。長年、公立学校の障害児学級を受け持ち、障害児学校にも勤めた著者が、他の教員や作業所の職員らと始めた性のセミナーでの実践をもとに書いた性教育の指導案である。教員を退職してから現在は、大阪府内で高等部卒業後の学びの場を立ち上げ、性教育や進路の授業を行うほか、障がいのある中学生や青年、保護者や支援者を対象にした性のセミナーを継続している。

本書をめくって最初に取り上げられているのは、「『快』の体験」である。自分の安全や他者とのよい人間関係の基盤となるのが「快」の感覚であり、それが学びの導入となっている。人が「気持ちいい」と感じるのは、性的な接触だけではない。誰かと一緒に過ごす喜びや楽しさ、あるいは気持ちを受けとめてもらったり、感謝の言葉をかけてもらったときの「こころの快（心地よさ）」そして、手をつないだり、からだを温めたりすることでの「からだの快」を感じることで初めて、「不快」に対する認識が高まっていく。つまり、「『快』の体験」を重ねることが、問題行動や性被害の予防の絶対条件なのだという。

「快」は、成長と自立を促す基盤になる。現場での豊富な経験から作り上げられた教材はどれもわかりやすく、能力や障がいの特性、セクシュアリティ、被害体験などに配慮するための「留意点」も細かく書かれている。性教育の場面のみならずふだんの対応でも役立つものだ。

「ダメ」という言葉を使わなくても性教育はできる。こころとからだの安心感から出発する性教育は、教育者・支援者にとっても快適な教育になるにちがいない。
(大阪大学大学院准教授 野坂祐子)